

二宮史学との対話

史学史の転換点にあたって

長谷川 貴彦

目次

はじめに

1. 参照系としての戦後歴史学
 2. 戦後歴史学から社会史へ
 3. 社会史から現代歴史学へ
- 結び

はじめに

このたび、岩波書店より『二宮宏之著作集』が刊行され、全5巻の完結を見るにいたりました。これは、歴史研究を生業とするものにとって、誠に喜ばしいことです。というのも、二宮宏之氏の研究は、戦後歴史学から社会史への史学史的な転換点にあった時期の歴史的思考を集約したものであり、20世紀後半の日本の歴史学のあり方を推し量るうえでの指標となるからです。なによりも、歴史学の最も良質な成果をまとめたかたちで後進の研究者や学生たちに提示できることの意義は大きいと思われます。優れた知的遺産が後世に継承される土台を作ったという点で重要な意味をもつことになるからです。

とくに第5巻に収められた年譜は、氏の歩みを振り返る意味で何かと便利な「手だて」となります。二宮氏は、1932年生まれ。『近代社会成立史論』(1947年)、『市民革命の構造』(1950年)などを掲げて戦後史学の旗手となった高橋幸八郎氏の薫陶を受け、戦後歴史学の絶頂期の1950年代に学生時代を過ごしました。その後、二宮氏は「戦後転向」ともいえる知的旋回をへて、1960年代にはフランスに留学してジャン・ムーヴレ氏に師事、17世紀を中心とした近世フランス農村史研究に取り組むこととなります。帰国後は、留学時代の成

果を広く刊行することによって、その名を世に知らしめることになりました。代表作「フランス絶対王政の統治構造」ならびに「印紙税一揆覚書」は、この時期の作品となります。

1980年代には、阿部謹也、良知力、川田順三の諸氏とともに『社会史研究』を主宰、またアナル学派の紹介を試みるなど、いわゆる社会史ブームの火付け役となります。二宮氏の言う「常にはみ出していく歴史学」としての「社会史」の探究が始まったわけです。もちろん、その実体は、今日では「文化史」といわれるものなのかもしれません。1990年代には、歴史人類学を標榜する二宮氏の歩みは、いわゆる文化論的転回と軌を一にしたものとなります。最晩年の「歴史の作法」は、言語論的転回ないしは物語り論的転回を意識したのですが、これまた同時代の歴史研究のナビゲーターとしての役割を果たすことになりました。

こうした二宮宏之氏の知的歩みは、いくつかの「対話」を行なうことによって歴史研究における架け橋を設定していたように思われます。ひとつは、戦後歴史学から社会史へという史学史上の展開を牽引していったことです。二宮氏は史学史の転軸手として、戦後歴史学に内在しながら、そこから社会史への「内破」を推進していったのです。それは、別な角度から見れば、日本とフランスとの対話を行なうものでした。これは、二つの国の歴史学の架け橋となったということではなく、日本の「現在」から出発しながらフランスの「過去」を対象として「対話」を行なうという、E・H・カー一流の歴史実践を試みていたといえます。

歴史学は転換期にあるということが言われて久しくなります。とすれば、戦後歴史学から社会史

へという史学史上の転換を自覚的に進めてこられた二宮氏の足跡に学びつつ、社会史から現代歴史学へと変貌を遂げつつある歴史学のあり方を考えてみる、ということもなにかの意義があるかと思えます。もちろん、この報告では、そのすべてを論じ尽くすことはできません。戦後歴史学、社会史、そして現代歴史学の特質について、〈実証主義批判〉、〈構造〉と〈主体〉というキーワードによって概観して、そのラフなスケッチを描いてみることにしたいと思います。

1. 参照系としての戦後歴史学

(1) 実証主義批判

戦前のアカデミズムの主流は、明治政府のもとで帝国大学を中心に進められた歴史学の制度化のなかにあつて、ランケ史学の弟子たるルートビヒ・リースによって先導された国史を中心とする実証主義的な歴史学にありました。1930年代になると、この実証主義の系譜の歴史学に対しては、アカデミズム内外から厳しい批判が寄せられるようになります。ひとつは、平泉澄らによって主導された皇国史観であり、もうひとつは、日本資本主義論争に見られるマルクス主義陣営での歴史認識でした。双方が共有していたのは、実証主義史学にみられる没価値的な歴史認識に対する批判意識であり、平泉が津田左右吉の記紀神話解釈に対して激しい批判を浴びせたのも、このためでした。

戦後歴史学は、科学主義と客観主義を標榜しながら、「無概念的な」歴史学に墮してしまった戦前のアカデミズムの実証主義史学と観念論的な皇国史観に対するアンチ・テーゼとして登場することになります。二宮氏は言います。「戦後歴史学という客観性の論拠となっていたのは、近代社会科学の概念と方法に依拠した科学的歴史学であり、独善的な神話的歴史観に対しては世界史の普遍的な法則が対置され、怪しげな日本精神に対しては歴史の基礎過程としての経済構造が対置されることになった。」「変革の科学的客観性の保証に関して

言えば、理論と実証の幸福な結合によって歴史に真実に到達しようと言う点で、その科学主義はいたって楽観的であった」のです。

(2) 構造と主体

戦後歴史学にはマルクス主義が強い影響力を及ぼしていました。そこでは、歴史のうちには普遍的な発展の法則が貫徹しており、それは社会構成体の移行としての継起的な段階を経て展開すると考えられておりました。この社会構成体こそが戦後歴史学における対象としての「構造」でした。そして、変化の契機・構造転換の契機をもつばら「構造」の内部に求め、内発的発展を重視していたところが特徴であったといえます。二宮氏があげる戦後歴史学の指標は、高橋史学に顕著に見られるもので、「のちに現代思想の一環として展開する構造主義との関連でみれば、それはいわば構造主義以前の構造主義、とりわけ発生的構造主義の立場にきわめて近い発想だった」ということになります。

戦後歴史学といえば、大塚・高橋史学が強調されることが多いわけですが、近年、とみに再評価されてきているのが江口朴郎氏の歴史学です。江口氏の執筆した「歴史学における近代主義の批判」(『帝国主義と民族』東大出版会、1963年、所収)は、ひとつには大塚史学の資本主義成立史論を批判したのですが、鋭利な論理構成と公正な論争的態度を示したものとして読むものを刺激する論考です。江口氏は、この論文のなかで、大塚史学に見られる近代主義的態度を批判しつつも、俗流化されたマルクス主義者が資本主義への移行を客観的条件の醸成によって進行すると想定していたのに対して、中産的生産者層という独自の主体を設定したことを高く評価しています。マルクス主義と近代主義という立場の相違こそあれ、主体概念への注目という点では、江口史学と大塚史学との間には、同型性をもった問題構成がみとれるのです。

戦後歴史学の特徴であるのは、この主体への強烈な関心です。それは、封建制から資本主義への移行を問題とした大塚・高橋史学においては、封建制度の体内に芽生えた近代化の担い手を析出することにあり、他方で、江口史学にとっての主体とは、世界体制としての帝国主義が成立してくるなかで、これに対抗する植民地解放闘争をになう「階級」と「民族」となります。この通底する主体への関心は、より広い文脈のなかに戦後歴史学を位置づけてみれば、その理由が明らかとなります。哲学者や文学者の領域に端を発し、丸山真男氏らの政治学者を交えて展開された「主体性論争」は、戦後日本の思想的出発点として位置づけられますが、戦前への反省的省察から戦後日本の民主主義的主体をいかに構築するかということにその狙いがありました。つまりは、対抗文化から発せられる「主体」の問題が共通する関心だったのです。

2. 戦後歴史学から社会史へ

(1) 実証主義批判

二宮氏における実証主義批判とは、いかなるものであったのでしょうか。この点については、「歴史の作法」第1巻のなかで「その原点に歴史家の問いがある」と明示的に述べられています¹。こうした「問いかけの歴史学」は、マルク・ブロックの歴史学方法論の論理構成に立っていることは明らかです。しかし、戦後歴史学との関連でいえば、社会史の旗手である二宮氏が、実証主義に対する批判的なスタンスをとっていることに違和感をもたれる方もいるかもしれません。事実、二宮氏は、

「講座派以来の概念史」を基軸とする戦後歴史学の閉塞状況を乗り越える手だてとして、「農民が具体的に生きている世界」に迫るために文書館史料に沈潜してフランスの農村の実体を調べるといふ、徹頭徹尾、実証主義的スタンスをとってきたからです²。

たしかに、「常にはみ出していく歴史学」としての社会史は、概念志向の戦後歴史学に比べた場合、歴史の実態により即したアプローチのようにみえるのかもしれませんが³。この問題を典型的に表しているのが、イギリス史における整序概念と実態概念をめぐる論争であるといえます。すなわち、松浦高嶺氏は、近代イギリス史を解釈するうえで、戦後歴史学が地主層を経済学的に構成された「金融資本家」という「階級」として捉えたことに対して、それは「整序概念」にすぎないと批判します。それに続く実証主義史家たちは、社会史的に構成された「身分・地位」としての「ジェントルマン」と定義しますが、これを歴史の実態に即した「実態概念」としたのです。

しかし、社会史もまた素朴実証主義に陥る危険性をはらんでおり、そこに二宮氏は早い段階から気づいていたといえます。1992年の日本西洋史学会において二宮氏は、この「実態概念」という呼び方を継承して、川北稔氏がジェントルマン的秩序を「あるがままのイギリス」と、谷川稔氏が多文化的なフランスを「素顔のフランス」と規定したことへの疑問を表明しています。「あるがまま」ないしは「素顔」という言葉にはらまれる素朴実

¹ 「歴史を認識し記述するとはいかなる精神の営みか。それを考えるにあたって、まずもって強調しておきたいことは、その原点に歴史家の問いがあるということである。... 歴史をとらえようとする人すべてにとって、歴史に立ち向かうその出発点には、自らの発する問いがあるはずなのだ。... ここで『問い』の持つ意味を特に強調するのは、歴史を個々人の主観とは関係なく客観的に実在するものと見なし、歴史家はそれを実証するだけだと考える、客体主義ともいえる歴史の受け止め方が、日本においてはとりわけ根強いからである。」「歴史の作法」第1巻（傍線、引用者＝長谷川、以下同）。

² 二宮氏は次のように述べる。「フランス時代、ひとつにはこの農村史をやってとつてもよかった。それは、日本での講座派以来の構造史の中で考えていた農村史とはまったく違って、人間が具体的に生きている世界だっていうことですね。」「インタヴュー 二宮宏之氏に聞く」第5巻。

³ 『『社会史』という名称は多義的である。以上に述べたような歴史学の立場を表すのにふさわしいともいえない。むしろ、ジャック・ルゴフの表現を模して、『もうひとつの歴史学』とでも呼ぶ方が適切かもしれない。いずれにしても社会史は、どこまでも問いなおしを続けようとする歴史学、筆者がかつて用いた表現に立ち戻るならば、自らをも乗り越えてどこまでもはみ出していこうとする歴史学に付された記号にほかならない。」「戦後歴史学と社会史」第4巻。

証主義への傾向に対する批判であったと思われる⁴。その後、二宮氏は自身の立場を若干修正したようですが、いずれにしても、「問い」とそれにふさわしい「理論」や「方法」もなく史料に向かうことへの戒めを示されたものとして考えるべきでしょう。

(2) 構造と主体

戦後歴史学における構造と主体の問題は、「封建制から資本主義への移行」、つまりは社会構成体の移行の担い手として構成されていたのに対して、二宮氏においては、「権力秩序と生活世界」の問題として提起されることとなります。

構造

二宮社会史における権力秩序論の代表的な作品が「フランス絶対王政の統治構造」(1979年)であり、そこで論じられている絶対王政の社团的編成がその核をなします。この社団国家論は、最近の近世国家論の文脈では二つの論点に分岐していくこととなり、文化的多元性の起源を探求しようという複合国家ないしは複合王政論、常備軍と官僚制にみられる伝統秩序の浸透を問題とする財政軍事国家論として論じられています。この社団国家論を二つの国家論を総合したもの、あるいは、未分化・未分離な国家論として解釈するかに関しては議論の分かれるところですが、いずれにしても日本の研究者にとって、近世ヨーロッパ国家論を近づきやすい領域にしたことは間違いないでしょう。

この社団国家論に関しては、名高い「上向過程・下向過程」論の方法論を継承するものとして高橋史学との連続性が強調されてきました。マルクス

を発想の遠源とする抽象から具体への思惟的展開は、高橋氏によって地代形態の範疇分類として利用され、農奴解放をめぐるヨーロッパの歴史的経路を明らかにしてきたことはよく知られています。もちろん、そこでは、社会構成体としての封建的土地所有の廃止を核とする独自のフランス革命論、つまり共同体の解体をもって市民社会の成立を展望する革命論が構想されていました。二宮氏は、この高橋史学を継承しつつ「中間団体の解体」の観点から独自のフランス革命論を展望していったといえましょう。

しかし、社団国家論はまた、当時の日本の社会科学一般の論争を反映したものでありました。それは、1970年代に東京大学社会科学研究所を中心として繰り広げられた論争、いわゆる「営業の自由」論争です。発端となったのは東京大学社会科学研究所編『基本的人権』第5巻における岡田与好氏の問題提起にあります。すなわち、岡田氏によれば、「営業の自由」なる権利は、自然権として存在しているのではなく、「公序」として追求されたものであり、また市場経済なるものは国家の政策的介入によってできあがる人為的構築物だということです。そこには、市場は自生的秩序なのか政策的構築物なのかという問題、ならびに、そこにおける独占(企業)や団結(組合)などの中間団体の位置づけをめぐる類型化がなされており、「社団国家」論の構成要素は出そろっているように思われるのです⁵。

主体

次に主体をめぐる問題に移りましょう。ここで取り上げたいのが、『印紙税一揆』覚書(1973年)であり、この論文は、いわば戦後歴史学の<外縁>として発生した民衆蜂起を論じたものです。

⁴ 「ジェントルマン資本主義にせよ、ヴォルテールのフランスにせよ、たしかにより実態に即した概念だと主張することは可能にしても、それ自体が整序概念であることに変わりありません。そのようにイギリスをみ、フランスをみるという歴史家の営みが、そこには介在しているのであって、決してあるがままでもなければ素顔でもない。そのところを十分気をつけておかないと、歴史はただ実証的にやればみえてくるということもどってしまいます。」「他者としての近代」第1巻。

⁵ 岡田与好「『営業の自由』と、『独占』および『団結』」東京大学社会科学研究所編『基本的人権 5』東京大学出版会、1969年。この論争は、いまでは余り言及されることもなくなってしまう感があるが、戦後歴史学の第に世代に属する人びと、岡田与好、山之内靖、遅塚忠躬氏なども積極的に関与したことで知られている。

ここでの〈外縁〉とは、フランスが均質な国民国家ではなく「中心対周辺」という対立軸を含んだ多様な存在であったこと、つまり、「反ヴェルサイユ」という契機をはらんだ地方の反乱であり、そこにはケルト的なブルターニュの文化的多元性も含まれています。そして、民衆心性の問題。経済的基礎過程に分析の主眼をおく戦後史学からは漏れ落ちてしまう「心性」の問題が初めて登場してきたのです。このような戦後史学ではとらえきれない問題との格闘が、その後の二宮社会史の出発点となっていたのです。

二宮氏はいいます。「この論文のなかには高橋史学から始まった構造論的な歴史学、ムーヴレさんのところでやった農村史や、アナルの数量的アプローチ、そして、マンドルーとの関わりが深いソシアビリテ論、この三つがね、あの論文の中には一緒になっているんですよ。」「歴史っていうのは、具体的に人間が動く場で初めて顕現するのだという気持ちね。その動き出すところで初めてそれぞれが意味を持つという気持ちがものすごく強くなったのは、印紙税一揆をやる過程です。」ここでは、民衆の生活世界が、ルイ 14 世治世における戦時支出増大とそれに対処する印紙税などの大衆課税、それらが引き起こすブルターニュ農民一揆というシナリオから構成されており、アナル派のいう〈長期的持続〉〈変動局面〉〈事件〉という「図柄」が描かれていることは明らかであります。

なによりも二宮氏が関心を置いているのは、蜂起する民衆の心性の世界です。「バリケードの残影が残っていましたから、ちょっと跳ね上がった言い方をしているんですが」と前置きする二宮氏は、蜂起する民衆の姿をオルタナティブな主体像として描き出そうとしています。圧巻ともいえる筆勢で読者に訴えかけてくる、あの文章が登場するわけです。蜂起の残響、それはすなわち同時代の 1968 年という経験の残響としても聞き取れますが、この蜂起する民衆こそが、二宮社会史におけ

る〈主体〉の姿だったのです⁶。

3. 社会史から現代社会学へ

最後に、現代歴史学の諸特徴について論じてみます。ここでいう現代歴史学とは、二宮氏自身の用語法とは異なっています。二宮氏によれば、それは「近代知の再審」を経たあとでの歴史学の動向をさすものとされ、二宮氏はそれを「社会史」として表現されました。『アメリカ歴史評論』(2012 年 6 月号) は、「転回以降の歴史学」と称した特集を組んで近年の歴史学を回顧するという試みを行なっております。それにならって、ここでは、言語論、文化論、あるいは空間論的な諸「転回」を経た世代の歴史実践を現代歴史学と規定しておくことにします。そこでは過激なポストモダニストのものまで含む〈実証主義批判〉が先鋭化して、その反動として新実証主義ともいえる傾向が隆盛しています。他方で、〈構造と主体〉の問題は密接不可分のものとして、文化史や言語論的転回以降の歴史研究の指標となる視座を提供してくれているのです。

(1) 実証主義批判

さて今日的な文脈での実証主義批判とは、どのような意味をもつのでしょうか。むしろ現在は、人文科学あるいは社会科学においては「実証主義」が攻勢を強めており、批判的歴史学は守勢にたたされています。その「攻勢」のあり方は、いくつ

⁶ 「一揆の過程を通じて農民たちは、単に王権のみならず領主も教会も都市ブルジョワジーも、すべてを含めこれらを敵対者として意識していた。… われわれはむしろ、もろもろの「権威」に対する民衆の反逆、人としての誇りを踏みにじられてきたものの一切の抑圧者に対する反逆を、そこに見る。… しかし、ここに発現されたひととしての矜持は、100 年後のブルターニュ農民の胸に力強く甦らなかつたと言えようか。そして更に、「大革命」における幻影を超えて更に遠く生き続けなかつたと言えようか。… 叛乱を起こした農民たちは、より根源的な「自由」をその要求として掲げたのであった。その意味で、幾重にも重なった歴史の歪みを背負い込んでいる辺境の地に勃発したこの叛乱は、アンシャン・レジーム期における「自由」の意味をも、見事に照らし出すことができたと言ってよかろう。」『印紙税一揆』覚書 第 2 巻。

かの特徴を持って登場してきますが、それにともなって「実証主義批判」も多様な意味を帯びることになっております。

ひとつは、社会史研究の深化という問題に関連します。これは「社会史のエンクロージャ現象」と呼ばれ、社会史研究が時間的・空間的に細分化した方向に向かうことによって、長期的変動や全体像を失っていることによります。つまり地域や時代ごとの分析対象が示す多様性が明らかとなり、社会変動による急激な断絶性が否定されて連続性が強調されることになったのです。これは、方法的なき詰まりとも関連しています。かつては社会変動を説明する因果関係を構築するにあたり、物質的利害に基礎をおく社会的カテゴリーに素朴な信頼を寄せていましたが、ローカルなレベルでの慣習や文化には、そうした利害に還元して説明できない場合があり、因果関係の複雑さが明らかになってきたからです。

ここで登場するのが言語論的転回ですが、これまで実証主義と言語論的転回是不俱戴天の関係として見なされてきました。たとえば、日本の文脈で、従軍慰安婦をめぐる論争のなかで実証主義とオーラルヒストリーが対置されたのはそのことを示しています。しかしながら、言語論的転回も、そのメッセージが歴史家に有用なものとして理解されるようになってきています。英語圏における言語論的転回の主導者であったステッドマン・ジョーンズは、次のように記しております⁷。つまり言語論的転回が促したのは、「資料の厳密な読み」ということにあったのだと。言語論的転回が素朴

⁷ 「ソシユール的アプローチは、歴史家が言説に先行する、ないしはその外部に存在する透明な過去を『あるがままの姿で』回復することができるという実証主義者のナイーブな信仰を認めない一方で、歴史家の探究それ自体を不可能にしている訳ではない。それどころか歴史家の探究それ自体を強化しているとさえいえるのである。なぜなら、その主張の根拠となっているものが、資料の内部において言語的な慣例が作動している点を理解しなければならないことにあるからである。」ギャレス・ステッドマン・ジョーンズ、拙訳『階級という言語』刀水書房、2010年。

実証主義に対して「逆襲」に出るのは、このような理由からでした。

(2) 構造と主体

構造

「転回」以降の歴史学の文脈のなかで「構造」を論じることは、ある意味で自己撞着に陥ることになります。ポストモダン状況においては、まさに「構造」のようなハードな概念が攻撃の対象となってきたからです。ピーター・バークによれば、ポストモダニズムとは、とりわけフーコーやデリダと結びつけられるひとつの思想運動であり、ポストモダンの心性とは「視点の多元性」や「不確実性の原理」などを特徴としているといえます。そこでは、かつて制約要因として考えられていた階級・共同体・国民のような「構造」が、柔軟性、流動性、脆弱性をもつものとして、再定義されるようになってきており、ジグムンド・バウマンが述べるように、リキッド・モダニティ（液体状の近代）のなかで、すべてが砂のような流動性のなかにおかれているかのようです⁸。

たとえば、「構造」という概念に代わって「ネットワーク」概念が使われていることが、このことを示しています。それは、研究対象との地理的・空間的な拡大と軌を一にしたものですが、交易活動をめぐる商人の社会的結合を意味するようなネットワーク論とは異なり、繰り返される日常的な諸実践のなかで、単発では意味のない行動の繰り返しが意味を創出し、規定性をもってくる過程のことを意味しています。この複数の諸主体のあいだで繰り返される行動様式（実践）が「ネットワーク」と命名されているのです。

こうしたなかで、現代歴史学における「構造」概念は、次のように定義されています。それによれば、伝統的な社会科学や言語哲学に見られる「構造」概念には、因果関係の決定論がはらまれてい

⁸ ピーター・バーク、拙訳『文化史とは何か』法政大学出版局、2010年。

るといいます。すなわち、下からの経済的決定論と上からの言語決定論という問題です。この決定論的思考が、歴史における人間活動の「主体性」agencyを消去することになり、したがって、歴史の変容の過程を把握不可能にしているといえます。このギデنزの構造化理論やブルデューの実践概念に依拠する議論は、言語論的転回以降の「構造」論にふさわしく言語の問題を俎上に載せており、さらに人間の主体性を復権させ、歴史変動、あわせて物質と言語記号論的な構造概念の分断をも超克しようというのです⁹。

主体

言語論的転回のなかでは、象徴や言語といった記号体系の規定性が強調され、人間の主体性は惨奪されてしまいました。たとえば、フーコーは、主体は言説内部の位置に起因する「効果」effectにすぎないものとして、古典的な主体の自律的アクターとしての役割を消去しました。それに対する批判として、記号体系から個人や社会による記号の受容や解釈に注意が払われるようになり、歴史的アクターとしての「主体の復権」がはかられているのです。しかし、二宮氏において蜂起という事件のなかに主体像が設定されていたのに対して、この主体は、日常性のなかで作動するものです。これが、前述の「ネットワーク」論へとつながります。

「主体の復権」によって歴史学の中心的概念として浮上してきているのが、「経験」と「実践」です。とりわけ、「経験」は言語論的転回に対抗するうえで、歴史家の結節点となってきた感があり、それは意味を積極的に創出する過程とされています。主体の復権は、「パフォーマンスへの転回」としても読み解くことができます。ここでは、「実践」そのものが構築される、つまり「実践」は、スクリプト（台本・脚本）とパフォーマンス（演技）の二つの領域から構成されており、また状況が異

なれば、同じ人物でも異なる行動様式をとることが意味されているのです。

主体の復権は、「情動」emotionや記憶の歴史など主観性への関心をも高めています。たとえば、これまでの歴史学のなかでは、非合理的な領域として無視ないしは軽視されてきた「情念」が歴史形成の契機となるというのです。また記憶の歴史は語られて久しいものですが、現在の記憶論は「第三の波」にあるといえます。記憶研究は、当初は記憶の記号論的な分析、ついで「記憶」の構築主義的分析がなされ、「記憶」がさまざまなポリティクスのなかで生産され、流通し、最後に受容されていくプロセスを検討しました。現在の「第三の波」は、主体による記憶の「受容」の局面を取り上げて問題としています。つまり、どのように集合的記憶が個人レベルで受容し内面化していったのか、そこでの個人の体験との衝突や軋轢などが問題にされているのです。

結び

アナル派の社会史以降、世界の歴史学の中心はアメリカ大陸に移動してしまったかのようにみえます。事実、自他ともに認めるかたちで「転回」以降の歴史学を主導してきたのは、アメリカの歴史学界でした。言語論的転回はヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』（1973年）に端を発すると言われていますが、「フレンチ・セオリー」と自覚化してポスト構造主義の理論を輸入し、フーコーとデリダの影響を受けてきたのはアメリカ歴史学界でした。またクリフォード・ギアツ『文化の解釈学』（1973年）に先導された文化論的転回を推進してきたのもアメリカでした。さらにいえば、ポストコロニアル研究やグローバル・ヒストリーに主導される空間論的転回をも遂行してきました。アメリカ歴史学は、いわば諸「転回」の起点となってきたのです。

しかし、ただアメリカの歴史学の模倣をすればよいというわけではありません。最近刊行された

⁹ William Sewell, *Logics of History: Social Theory and Social Transformation* (University of Chicago Press, 2005).

18 二宮史学との対話

柴田三千雄氏のフランス革命論『フランス革命はなぜおこったか』（山川出版社、2012年）を読むと、冒頭に「われわれ日本人にとってフランス革命とは何か」という問いが登場します。二宮氏が高橋史学やさまざまな論争にこだわっていた点にみられるように、「日本」という磁場から問題を立ち上げる重要性を痛感します。その際、継承すべき知的遺産として、民衆史研究（安丸良夫・鹿野政直）や植民地主義・帝国主義研究（江口朴郎）の成果があげられるでしょう。民衆や植民地主義にこだわる姿勢は、広くいえばそれは日本の近代理解に陰影をもたらし、独特の近代認識を構築していきました。それは、かつての近代化論をめぐる丸山真男とロバート・ベラーの論争、近年のモダニティ論をめぐる中村政則とアンドリュー・ゴードンの論争に表出されているとも言えます。

「日本」にこだわるということは、二宮氏の言葉を用いれば、広く「いま」と「自分」から問題を立ち上げる「問いかけの歴史学」を実践することになりましょうか。「いま」とは何か。その指標となるものは、新自由主義、大学改革、競争原理・成果主義、格差社会、貧困と生存、環境問題など、枚挙に暇がありません。他方で、「自分」とは何か。現在は、歴史の転換点、そして歴史学の転換点にあります。晩年の二宮氏が、歴史家の評伝の執筆に力をいれていたのは、時代と格闘してきた歴史家個人の歩みから「自分」を発見するヒントを探ろうとしていたのではなかったのでしょうか¹⁰。それはまた、今日の報告において、二宮氏の歩みから私が引き出したかったメッセージ

でもあるのです。ご清聴ありがとうございました。

（はせがわ たかひこ・北海道大学）

¹⁰ 「先生が厳しく求められたのは、新しい歴史学であろうと旧い歴史学であろうと、歴史家の仕事の質なのであった。残念なことに、この「質」を測る便利な物差しは存在しない。私たちにとって可能なのは、身をもってその質の高さを体現している作品に立ち戻ることだけである。そして、新しい歴史学を志す者こそが、そのことを真先に知らねばならない。数えきれぬほどに生み出されるフランス歴史学の作品の中で、今日の関心からは一見はずれているかに見えるムーヴレ先生の遺著を、筆者がとりわけ大切に思い、繰り返しそこに立ち戻りたいと希うのも、まさにそれゆえである。」「**ムーヴレ先生と歴史家の精神**」第5巻。